

おばたけいせき
11. 大畑遺跡

所在地：福井市花野谷町

調査原因：県営経営体育成基盤整備事業（ほ場）
岡保東部地区

調査期間：平成 26 年 5 月 1 日～8 月 29 日

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：4,500 m²

時代：弥生、奈良・平安



位置図 (S=1/50,000)

調査の概要 大畑遺跡は奈良時代～中世の散布地として福井県遺跡地図に登録されている遺跡であり、福井市大畑町・花野谷町・宮地町にまたがって広範囲に展開しています。今回の調査対象地は遺跡範囲の北東部にあたり、溜池が造成される範囲を中心とします。調査前の状況は山裾で段をなす水田および道路でした。

遺構 調査の結果、調査区中央部を東西に横断する河川と、その両岸に広がる遺構を検出しました。調査区を東西に横断する河川は、谷奥から北側の山裾に沿って流れていたようです。川幅は上流側にあたる調査地東部で約 20m、下流側にあたる西部で約 50mをはかります。

河川の右岸側では掘立柱建物 4 棟 (SB1～4) の柱穴を含む小穴・土坑を 350 基以上、溝 4 条を検出しました。これらの遺構は北西側に偏って分布しており、南側および東側では希薄です。山裾斜面を水田に造成する時に削られてしまったことも考えられますが、河川に近い場所にはもともと遺構は少なかったのかもしれない。

検出した掘立柱建物の規模は、SB1 が 1 間×1 間 (東西約 2m×南北約 1.5m)、SB2 が 3 間×2 間 (南北約 5.5m×東西約 4.0m)、SB3 が 2 間×2 間 (南北約 6.0m×東西約 4.5m)、SB4 が 2 間×2 間 (東西約 4.5m×南北約 4.2m)をはかります。比較的規模の大きい SB2 と SB3 は長軸を南北に、規模の小さい SB1 と 4 は長軸を東西に向けており、両者の間には時期差も考えられます。また、SB3 の柱穴は径 1m 前後のものを含んでいますが、近接して同規模の柱穴が認められることから、建て替えがおこなわれたと推測できます。なお、柱穴 P 161 では径 30 cm ほどの柱根が残っていました。

河川の左岸側では小穴・土坑を約 70 基検出しました。柱穴を含むものと考えられますが、建物を復元するまでには至りませんでした。遺構は調査区の東端と西端に分かれて分布し、中央部では見つかりませんでした。水田を造成する時に削られてしまったと考えます。

遺物 河川の右岸側の主な遺物は奈良・平安時代の土器です。ほとんど遺物包含層から破片の状態で出土しました。遺構の中から出土したものは少ないですが、小穴の一つ (P 84) から土師器の甕と一緒に出土した鉄の鋤先が目立ちます。甕はほぼ完形でしたが、鋤先は半分しかありませんでした。当時貴重品だった鉄の道具をわざと割って埋めたとも推測され、祭祀的な様相を帯びた出土状況といえるでしょう。

河川の左岸側の主な遺物は弥生時代後期の土器です。やはり遺構から出土したものは少なく、ほとんどは河川を埋めた土から出土しています。土器は底の方に堆積した砂礫からも多く出土していることから、当時の河川には水が流れており、そこに土器を投棄したものと考えます。なお、河川の埋土から出土した奈良・平安時代の土器は極めて少なく、その頃までに河川はほぼ埋没したようです。

まとめ 東西に流れる河川とその両岸に分布する遺構を検出しました。出土遺物から、右岸の遺構は奈良・平安時代、左岸の遺構は弥生時代後期の所産と考えられます。河川は弥生時代後期の時点では水が流れていましたが、奈良・平安時代の頃にはほとんど埋没して、湿地になっていたようです。おそらく、弥生時代には右岸側が河川の氾濫原となっており、左岸に形成された自然堤防上の方が居住に適していたのかもしれませんが。

奈良・平安時代になる頃には河川の大部分は埋まり、右岸側が高燥な土地となったことで集落が営まれ、左岸側の谷中央部では現在と同じように水田が開かれたものと想像されます。

(田中祐二)



写真1 調査区全景(南から)

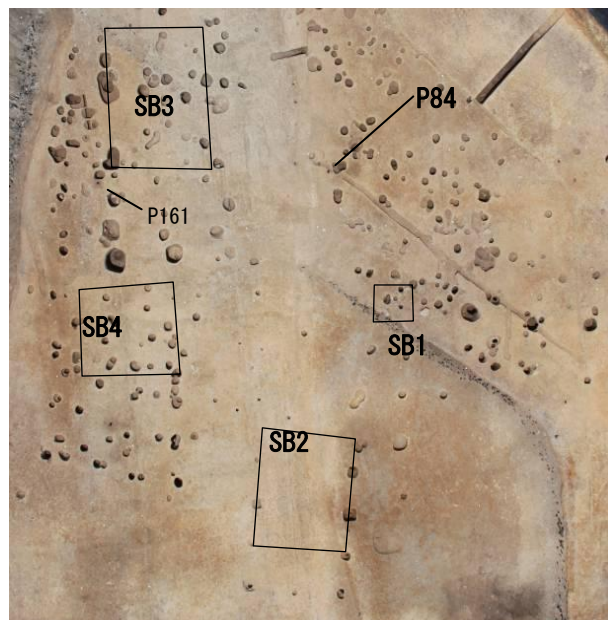


写真2 奈良・平安時代の遺構配置(南から)

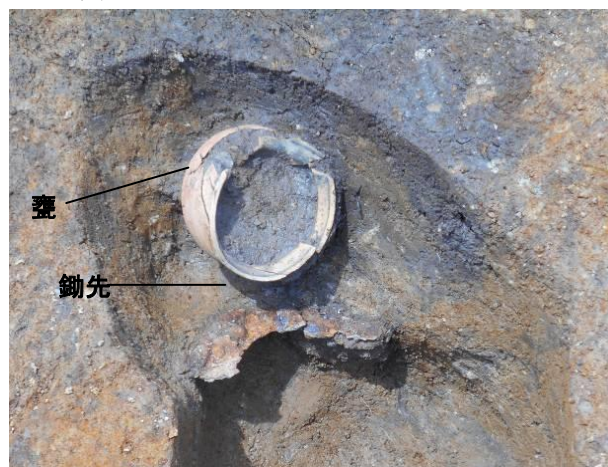


写真3 甕・鋤先出土状況 (P84) (北東から)